



Title	パキスタンにおける言語運動年表
Author(s)	萬宮, 健策
Citation	アジア太平洋論叢. 2004, 14, p. 123-144
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/100004
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

パキスタンにおける言語運動年表

萬 宮 健 策*

本表は、パキスタン国内の各民族の言語を核とした運動を主要言語別にまとめたものである。¹⁾パキスタンは、1947年8月14日にイギリスから分離独立した、ムスリムが多数を占める国家である。そこには全人口の約6割を占めるパンジャービー民族をはじめとする、多数の民族が居住し、多数の言語が話されている。

以下に触れる国語ウルドゥーや、パンジャープ州を中心とした地域で話されるパンジャービー語、パンジャープ州南部を中心とするサラエキー語、シンド州を中心とするシンディー語は、インド・ヨーロッパ語族の中でもインド・アーリア諸語に数えられる。また、北西辺境州からアフガニスタンにまたがって話されるパシュトー語や、バローチスターン州を中心とするバローチ語はイラン語派に属する。北方地域(Federally Administered Northern Areas: FANA)に目を向けると、スカルドゥを中心とした地域のバルティ語は、最西端に位置するチベット語方言であり、フンザを中心とした地域で話されるブルーシャスキー語は系統不明語の1つに含まれる。

このような多数・多種の言語を抱える状況の中、独立後、パキスタン政府は、国内のどの地域にも属さないウルドゥー語を国語(National Language)と規定し、国民への浸透を図り、「パキスタン国民」というアイデンティティ形成を目指して利用しようとした。現行の1973年憲法では、第251条において、パキスタンの国語をウルドゥー語、英語を暫定的な公用語(Official Language)と規定している。同条には、憲法発布から15年以内に公用語もウルドゥー語に切り替えると明文文化されているが、

* (財)世界経済調査会 主任研究員

期限である1988年を過ぎた現在でも政府内の公文書などに英語が多用されるなど、中央政府の無策もあり、また植民地時代より続いてきた英語教育が国民の間に浸透しており、ウルドゥー語の公用語化は、進んでいるとは言えない。

一方、4州のうちスィンド州をのぞく3州は、州の公用語(Provincial Languages)をウルドゥー語と規定し、スィンド州はウルドゥー語とスィンディー語を州の公用語と規定している。パキスタンでは、人口の上で優勢だったパンジャーブ州のパンジャービー民族や、インドから移住してきたムハージル²が中央政府や軍部での要職を占めたことから、それ以外のスィンディー、パシュトゥーンらの民族は、それぞれの母語とは異なる言語の押しつけへの反発という形で、中央政府に対し権力委譲を要求し始めた。

言語の相違のみを、各地における民族運動の契機と指摘することはできないが、分離独立以降のパキスタンにおいて、母語とは異なる言語を国語として強要されたことが、各地で見られた中央政府への抵抗の一因となったことは指摘できよう。本稿で紹介する年表にも明かなように、1960年代に各地で活発化した言語運動は、パキスタン国内における各民族運動と連動しており、各言語が民族を象徴する役割を果たしていた。1957年に各地の民族政党が「民族大衆党(National Awami Party of Pakistan: NAP)」という政党連合を結成し、中央政府への対抗姿勢を示した[Amin 1988; 89]ことに代表されるとおり、各地での運動は互いに影響しあい、協力する関係にもあった。民族大衆党は、言語別の州再編方針をはじめとして、言語運動を核とした政策を提案し、その実行を中央政府に要求した。同党の活動は、1975年にブットー首相が率いるパキスタン人民党員である北西辺境州政府閣僚を暗殺したために、政府が活動禁止処分を打ち出さなければならなかったほど激しいものとなった。[加賀谷・浜口 1977]が指摘するように、「民族大衆党の掲げた複数の民族体で構成されるパキスタン国民は『色と香織の異なる花でつくられた花束』である」という民族理論は、ムスリムを単一民族とするパキスタン・イデオロギーに反し、パキスタン解体論につながる危険思想」なのであった。このような民族大衆党の活動の一翼を担った言語運動は、パキスタンにおける民族運動において重要な位置を占めていた。

このような言語運動の例は、スィンド州においても、スィンディーとムハージル

の対立という構造でも展開された。ウルドゥー語を母語とするムハージルがインド州の都市部(特にカラチー)に流入したことにより民族としての危機意識が芽生えたスィンド州では、1971年の言語紛争(linguistic conflict or lisānī fasādāt)に代表されるとおり、中央政府に対する激しい抵抗運動が起きた。その背景には、パキスタン政府が、財産を現インド側に残してきたムハージルに対し、インドへ移住したヒンドゥー教徒が残した土地などを優先して分配する優遇政策をとったことがあった。この政策により、スィンディーはウルドゥー語を母語とするムハージルの「自分たちの土地への侵入者」と認識するようになったのである。これが、前記「言語紛争」に代表されるとおり、スィンディー語話者による自治権拡大要求運動として発展していった。1990年代初頭には、その緊張関係が頂点に達した。1992年には軍部による治安維持作戦(Operation Clean-up)が実施されるほどに激化した。その後この運動は、その旗手でもあった G.M.サイイドの死去(1995)と前後して低調となり、現在は、スィンド州の内陸部を中心に活動している民族政党がその中心的役割を果たしている。運動が停滞したとはいえ、中央政府に対する激しい抵抗によって、スィンディー語を州の公用語の1つと規定したことはスィンディー民族による運動の大きな成果といえる³。

本年表は、英領インド期からの、現代のパキスタンに相当する領域を中心とした地域における言語運動を、言語別にまとめたものである。2つ以上の言語に関わる場合は、その言語にまたがる形をとった。本年表によって、言語運動がパキスタンにおける民族運動の象徴的な意味合いが明らかになり、言語史・政治史を理解する上での一助となることを願うものである。

注

- 1 本表は、黒崎卓・子島進・山根聡編『現代パキスタン分析—民族・国民・国家—』(岩波書店、2004年)所収の「言語運動年表」(表3-2: pp.108-119)に加筆したものである。
- 2 ムハージル muhajir 「移住した者」を指すが、ここでは特にパキスタン独立時にインド側からパキスタン領に移住した人々とその子孫を指す。(大塚和夫他編『岩波イスラーム辞典』)
- 3 パキスタンおよびインドのスィンディー民族は、若年層のスィンディー語・文化離れという困難な問題を抱えている。また、「地域語」という範疇を出ることのないスィンディー

語が、この先、その範疇を超えた地位を得ることを望んでいるわけではなく、英語やウルドゥー語、ヒンディー語の重要性が高まりつつある現状を、彼らは理解している。

しかし筆者には、そのような状況を冷静に理解した上で、シンディー語が有する歴史的・文化的・文学的資産を保護し、発展させていこうとするシンディー民族の強固なアイデンティティは今もなお失われていないように映る。宗教の差異が争いの原因となりがちな南アジアにおいて、「シンディー語を理解すること」をアイデンティティの中心においているシンディー民族は、近年のインターネットの普及も手伝って、頻繁に交流を行っている。そして、それまで関心を持つことが少なかった、特にアメリカやイギリスといった第三国に居住する若年層も、シンディー語、シンディー文化への関心を持ち始めていると言える。インターネットを用いて、近隣に居住するシンディーを探し、シンディー語講座への参加者を呼びかける、という具体的な行動がそれを物語っている。異なる文字を用いているが、言語としては同一であり、シンディー語を理解し、シンディー文化を有していることは、彼らのよりどころの1つであると考えられるのであり、このような意識が言語運動・民族運動を支えるものと理解する。

参考文献

- Amin, Tahir 1988 *Ethno-National Movements of Pakistan : Domestic and International Factors*. Islamabad : Institute of Policy Studies.
- 加賀谷寛・浜口恒夫 1977 『南アジア現代史Ⅱパキスタン・バングラデシュ』,山川出版社.
- 佐藤宏 1988 「西パキスタンの統合(1955年)とベンガル—東パキスタン自治権運動の再検討—」『南アジア現代史と国民統合』(佐藤宏編), アジア経済研究所, pp.327-365.
- 白井桂 1990 「バングラデシュ・ナショナリズムの源流—ベンガル語国語化運動を中心として—」『バングラデシュ:低開発の政治構造』(佐藤宏編), アジア経済研究所, pp.41-85.
- 砂野幸稔ほか 2004 特集「世界の民族問題」『月刊言語』2004年5月号(Vol.33, No.5),大修館書店.
- 萬宮健策 2004「地域語のエネルギーに見る国民統合と地域・民族運動」『現代パキスタン分析—民族・国民・国家—』(黒崎卓、子島進、山根聡編), 岩波書店,pp.83-119.

主要民族による言語運動に関する年表(インド・パキスタン分離独立前)

	ウル ドゥー語	スインディー語	サラエ キー語	パンジャービー語	ベンガー リー語	ハローチー語	バビュター語	ブラフマー語	その他の重要事項
1835									イギリスが、英語重視の教育政策を発表。
1837									裁判所用語が、ペルシア語から英語に切り替え。
1843									スインドが英領インドに併合。
1847		R. K. Pringle スインド 地方行政官が、ボン ベイ知事に対し、スイン ディーの言語事情に関する 報告書を提出。							
1849									パンジャブが英領インドに併合。
1851		ボンベイ管区が全て の官吏に対し、スイン ディー語運用能力試 験実施を通告。							
1853		7月：ナスフ体による 正書法決定。							
1854				パンジャブ州内で 司法、教育言語とし てウルドゥー語が用い られていた。		5月 14 日：英政府 が、カラートの独立を 認めるミール・ナ スィール・ハーンとの 条約締結。			
1870									ラーホールにオリエンタル・カレッジ設立。
1875									サイヤド・アフマド・ハーンがアリーガルにムハ マダン・アングロ・オリエンタル・カレッジ(後 のアリーガル・ムスリム大学)設立。
1877				オリエンタル・カレッ ジでウルムキー文字 によるパンジャービー 語が教えられ始める。					
1878									3月 13 日：インドで現地諸語出版規制法制定。
1879						5月 26 日：ガンダマク条約により、クッラム、ピシー、スィスピーの各 県を英領インドに併合。			
1881		ダーラーム・ギドゥー マル副 収税官が、 デーヴァナーガリー文 字によるスインディー 語表記の廃止を行政 官に対し権限し、行政 官もこれを支持。							

1882					ラーホールにバンジャール大学創立。	サイヤド・アミール・アリーが教育委員会の席上、ムスリムとヘンドゥーの違いを強調して、ムスリムとウルドゥーの関係は、ヘンドゥーとベンガリーとの関係と同じであると発言。					
1894											デュアランド・ラインが確定し、アフガニスタンとの国境が明確に。
1896					ポーハラ・ナート (ヘンドゥー教徒) によりペルシア文字によるバンジャール語新聞 Amrat Patreeka がジェヘラムから出版される。						
1899						ナワーブ・アリー・チヨブトリーが Bangiya Sahitya Visayak Musalman Sabhat(Muhammadian Society for Bengali Literature)設立。					
1900											4月18日：連合州が公用語にヒンディー語を加える。
1903	ウルドゥー語振興協会 (Anjuman-e Taraqqi-e Urdu)デリーに設立。										
1905											インド総督カーズンガが「ベンガル分割令」を施行し、分割反対運動勃発。
1907					基礎教育段階でバンジャール語の使用を広めるよう指導。						
											ベンガル分割令が撤回され、カルカッタからデリーへの首都移転発表。
1912						ベンガル州ムスリム連盟の決議が、ウルドゥー語ではなく、ベンガリー語により記述される。					
1913						11月13日：ダゴールが、詩集「ギーターンジャリ」(1910年出版)でノーベル文学賞受賞。					
1918	ウスマーニヤ大学 (インド、ハイダラーバド)ウルドゥー語を教育言語とする。										

1920							12月：インド国民会議派が、地方組織を言語別に再編。
1923						アフガニスタンで発布された憲法がバクトー語で記述される。	
1925						アッラー・バフシュ・ユースフイーがウルドゥー語紙 Sarhad を創刊。	
1926						スワートの王が、バクトー語を同国の公用語と宣言。	英領インドがスワート王国を承認。
1928						アブドゥル・ガッファール・ハーンが雑誌 Pakhtun を創刊。	
1929						アブドゥル・ガッファール・ハーンが「神の奉仕団」運動開始。	
1932						12月：カラチーから発行の Al Baloch が「植民地ローチスターン」の領土を示す地図を掲載。	北西辺境州が Governor's Province の地位を獲得。
1933						全ベンガル・ウルドゥー協会 (All-Bengal Urdu Association) 設立。ベンガル語をヒンドゥー語と見做す批判し、ウルドゥー語こそがムスリムに教えらるべきであると主張。	
1935						Kalat National Party 結成。	クエッタで地震。 8月2日：新インド統治法成立。北西辺境州、スindh州が誕生。

1936	全インド進歩主義作家同盟結成(～1955)。 全インド・ムスリム連盟(All India Muslim League)中央選挙対策本部が選挙綱領を発表し、言語の項目として「ウルドゥー語・ウルドゥー文字を保護し普及させる」という一文が含まれた。	スィンド地方がボンベイ管区から分離。				アフガニスタン国王命により、パシトゥー語がアフガニスタンの国語となる。		
1937	全インド・ムスリム連盟ラクナウー会議で、ウルドゥー語を全インドの共通語とすることを推奨するとした決議を採択。		ラクナウー決議(ウルドゥー語の項参照)に対し、ベンガル州代表が反対。	2月5日:The Kalat State National Party がスィンピーで結成。		ミヤーン・ジャーファル・ハーン北西辺境州教育相が、「北西辺境州内の小学校(Priamry Schools)ではパシチュート語を教育言語とすることを推奨する」との方針を発表。	マドラス州でヒンディー語導入に反対する運動が暴動化。	
1938	「建国詩人」アッラーマ・ムハンマド・イقبال没(1877～)					北西辺境州政府が、基礎教育段階においてパシチュート語を教育言語に。実際には、州内パシチュート語地域のみで実施。		
1939				7月20日:The Kalat State National Party がカラート政府から違法と宣告される。				
1940							3月23日:ムスリム連盟が「ラーホール決議」採択	
1941							ジャマアテ・イスラミー、ラーホールで創設。 カラチャーで英字日刊紙 DAWN 創刊。	
1942							9月19日:インド共産党が、多民族統一決議を行う。	
1944				ベンガリー語を東ベンガルの公用語とすべく、East Pakistan Renaissance Society of Calcutta 設立。				

主要民族による言語運動に関する年表(インド・パキスタン分離独立後)

	ウルドゥー語	スインデー語	サラエ キー語	ベンジャ ビー語	ベンガリー語	ハローチー語	バシュ トール語	ブラー フイー語	その他の重要な事項
1947	7月:ズィヤ-ウ-ウディーン・アフマド・アリー・ガール・ムスリム大学学長が、パキスタンでの教育言語をウルドゥー語とすることを宣言。 11月 27 日 ~ 12 月 1 日 : カラチーで「全パキスタン教育会議」開催され、ウルドゥー語の国語化について論議。				7月:ベンガリー語の言語学者ジャヤヒトウッラーが、アリー・ガール・ムスリム大学学長の宣言(ウルドゥー語の国語化)に反発。 9月:東パキスタンの青年グループが、民主青年連盟を組織。法廷と教育の場ではベンガリー語を使用することを要求。 10月:ベンガリー語公用語化闘争委員会が組織される。	ハローチー語運動の活動拠点がカラチーに、The Lyari Adabi Board, The Bauchi Academy, The Fazil Academy などが相次いでカラチー市内に設立される。 8月 12 日 : カラチーの藩王アフマド・ヤール・ハーンがハローチースターンの独立を宣言。 12 月 14 日 : ハローチースターン議会がハローチー語を公用語にすることを推薦。		8月 14 日 : パキスタン独立 10 月 26 日 : カシミールの藩王が、インド連邦への参加を表明。	
1948	2月:制憲議会でリヤーカト・アリー・ハーン首相がパキスタンの国語はウルドゥー語以外あり得ないと主張。 3月 21 日 : ムハンマド・アリー・ジンナーが、タッパで「ウルドゥー語こそパキスタン唯一の公用語であるべき」と発言。 3月 28 日 : ラーホールでパキスタンでの第1回ウルドゥー語会議開催。 ウルドゥー語を教育言語とし、4年以内に現在の英語が得ている地位をウルドゥー語に与える。そして10年級まではウルドゥー語を必修科目にし、修士課程ではウルドゥー語を必修科目に設定し、さらにウルドゥー語の活字開発を行うという提案がなされる。	5月8日:カラチーで Awami Tanzeem 結成。 ベンガリー、バシュトラーン、ハローチー民族が団結して自治権拡大を要求。			3月 15 日 : 全党派合同のベンガリー語公用語化闘争委員会が組織され、ベンガリー語を東パキスタンの公用語とすべく、州政府に要求し、ハージャ・ナースィムディーン州首相が、4月第1週からパキスタン議会、中央政府の公務員試験などでベンガリー語にウルドゥー語と同じ地位を与えるよう運動を開始するななど8項目の要求書に署名。 3月 19 日 : パキスタン総督ジンナーがタッパを訪問。 3月 21 日 : ジンナー総督がタッパ市内で、パキスタンの国語はウルドゥー語以外にあり得ないとの演説を行い、それを見た民衆が猛反発。				

				9月15日：文化人・知識人のグループが「文化協会」を結成(9月11日)、言語問題を提起した小冊子「ハキスタンの国語はベンガーリー語かウルドゥー語か」を発行し、以下のとおり提議。 (1) 東ハキスタンの教育・法廷・公的機関ではベンガーリー語を公用語とする。 (2) 中央政府における使用語をウルドゥー語とベンガーリー語の2言語とする。 (3) 会議は第3言語ないし国際語で行う。 (4) 行政、科学研究分野では便宜上英語とベンガーリー語を併用し、その間にベンガーリー語の改革を実施する。 12月：フォズレル・ラフマン中央政府教育相が、全ハキスタン教育大会(カラチー)で、ベンガーリー語をアラビア文字で表記することを示唆。	3月27日：カラートのハーンが、バローチスタンのハキスタンへの併合を宣言。 6月：ハキスタン政府が、Kalat State National Party を違法として活動禁止を宣言。 7月：ハキスタン政府がアブドゥル・ガッファール・ハーン率いる「神の奉仕団」を違法と宣告。	ハキスタン政府が「神の奉仕団」活動禁止処分。アブドゥル・ガッファール・ハーンが人民党 (Peoples' Party) 結成。	5月：第一次印パ戦争 9月：ムハンマド・アリー・ジンナー没 9月18日：ハイダラーバード藩王がインドに併合。
1949				3月19日：東ハキスタンにベンガーリー語言語委員会設置。ベンガーリー語のアラビア文字表記化について当面必要なしとの結論。	Olisi Adabi Jirga 設立	6月2日：インドで、ヒンディー語電報制度導入。	
1950	9月28日：制憲議会基本原則委員会が、中間報告提出。「ハキスタンの国語はウルドゥー語である」と明記。カラチー市内に、ウルドゥー語を教育媒体語	カラチー市から雑誌 Panjnad 創刊。	9月28日：制憲議会基本原則委員会が中間報告で、ベンガーリー語公用語化要求を完全無視。これを受け、民主連合行動委員会が発足し、独自の				

とするウルドゥー・ カレッジ創立。				アブドゥル・マジー ド・サールが月刊 誌「パンジャ- ビー」創刊。	3月：東パキスタン青年 連盟結成。「民族の教育 はその民族の言語で」と の基本原則に即り、ウル ドゥー語単一語語化、アラ ビア文字表記化に反対 し、ベンガリー語公用語 化要求を支援する立場を 表明。 8月：言語局による最終 報告書提出。ベンガ- リー語の非サンスクリッ ト化、東西パキスタンの語 を埋めるため、ウルドゥ- ー語を第二言語として学ぶ ことの必要性を提言。	Baloch Educational So- cietyがOman(ハローチ- 語月刊誌)をカラーチー リ創刊→Lathkhana Movement、Balochi Zaban-e Diwan 設立	10月：リヤーカ・アリー・ハーン首 相暗殺			
1951										
				Punjabi League お よび Punjabi Cul- tural Society 創 設。	2月21日：ダッカ大学の 学生がメデ(カル・カレ ジ構内に集結し、官憲とも み合い、警官の発砲により 学生4人が死に。					
				ムルターンで文 法書出版。	東ベンガル州の反ムスリ ム連盟政党が統一戦線 (United Front) を結成し 21項目の要求提出。					10月11日：インドで、初の言語州とな るアーンドラ・プラデーシュ州設置。
				GM サイカシインド 民族戦線 (Sindh Awami Mahaz) 結成。 Sindh Awami Jamaat, Sind Jinnah Awami League, Dastoor Par- ty, Sind Hari Commit- tee が参列。						
1953										

1954	5月17日：パキスタン制憲議会がウルドゥー語およびベンガル語を国語として承認。	G. M. サイイドが、インディアン・文協会総裁に就任。	サルダール・イクバル・デイルンによるPunjabi Morcha創設	5月17日：パキスタン制憲議会がウルドゥー語およびベンガル語を国語として承認。	1月1日：アフマド・ヤール・ハーンがパキスタン・ユニオンへの併合を認める署名。 7月14日：Prince Abdul Karim が Usoman Gul 創設。 7月：正書法の統一に向けた試み開始。	アブドゥッサマド・アチャクザイヤーがパキスタン・パシクトゥーン政治団体 Wrote Paktoon を結成。	Nawa-e Watan (グラム・ムハンマド・シャワーニー) が1953年創刊にブラーフウィー文字を採用。	6月16日：パキスタンがパロースターン連合州(Balochistan States Union)併合を決定。
1955	作家サアード・ハサン・マントー役 (1912 ~)			The Bengali Academy 設立。		アバーシーン芸術会議 (Abasin Arts Council) 設立	ONE UNIT 構想実施	
1956	憲法でベンガル語とウルドゥー語を国語 (State Languages) と規定。		3月9日：ハンジャール・ピー会議開催 (ライヤルプル)。初等教育段階での教言語としてベンジャール語を要求。	憲法でベンガル語とウルドゥー語を国語 (State Languages) と規定。	アーザート・ジャマール・デイルニが Balochi 創刊 (月刊紙) → 1958 年廃刊			3月23日：1956年憲法発布。「イスラム共和国」。 11月1日：インドで言語別州再編成法施行。
1957		民族大衆党 (National Awami Party) 結成。スインド、パロースターン、北西辺境、東ベンガル地域の地域政連合。					9月：雑誌 Muhallim に正書法が発表される。 ラジオ・パキスタンでブラーフウィー語放送開始。	
1958					10月6日：カラットの藩王アフマド・ヤール・ハーン逮捕。 パロースターン協会創始に向けた活動開始。			10月：アイユーブ・ハーン陸軍総司令官によるクーデター。憲法を廃棄。 12月31日：アイユーブ・ハーンが識字率向上を目的として、パキスタンの全ての言語をローマ字で表記するという案を内閣に提案するも、賛成を得られず。
1959		パキスタンの教育委員会が、1963年以降は6年生以上の学年で教言語としてウルドゥー語を用いる。西パキスタンのスインド地方においても同様の措置を執るものとする」との措置を発表。	シャフカト・タンヴィール・ミール・ジャビール・マッリス (Punjabi Majlis) (文学活動機関) を、政党禁止 → 1962年に活動禁止				11月4日：Brahui Adabi Board 設立。	

1960					ラジオ・パキスタン が Ravi Rang 開 始。 ハンジャーズ中等 教育局が6年生か ら12年生までハン ジャビー語を教 えることを許可。 月刊誌「ハンジャ ビー文学」創刊。				2月 24 日：ヌー ル・ムハンマド・パ ルワーナが、マス トウングで Elum (隔週刊新聞) 創 刊。	10月16日：インドで、ヒンディー 語百科事典刊行。
1961	8月17日：「ウル ドゥー語の父」アブ ドウル・ハク 没 (1875～)								会 議 で プラ ー フィー語の認知を 要求。	ラーホールで「地方語会議 Regional Languages Conference」 開催
1962		Sindhii Day スィン ディー協会設立 (1971年にスィンド 学研究所に改称)。			雑誌 Haq Allah 創 刊 (1965 年に休 刊)	2月21日：ダッカ 大学の学生が、ベ ンガーリー語の ローマ字による表 記には耐えられな いとしてデモ行進。				3月1日：1962年憲法発布
1963					4月6日：Punjabi Group of the Writ- ers Guild 活動禁 止処分			Parari 結成		1月4日：インドで、タミル語百 科事典刊行。 3月：中国と国境協定。
1964									12月：ラジオ・パ キスタンのプラー フィー語放送が45 分間に拡大。 パキスタン政府部 族広電出版局が プラフィー語を地 方語として認可。 スィンド州ラール カーナに Brahui Association Wara 設立。	パキスタン国営テレビ放送開 始。 パキスタンとイラン、トルコが地 域開発協力機構(Regional Co- operation for Development)結 成。
1965					Punjabi Guild が 雑誌 Lahran を創 刊					1月：初の大統領選挙 1月 26 日：インドで公用語法 施行。マドラスを中心に各地で 反ヒンディー語暴動 9月16日：第二次印パ戦争

1966	スインド大学の学生が、教育言語としてスインディー語を採用するよう要求し、スインディー語日刊紙がこれを支持。			2月：シェフ・ムジブル・ラーマンが16項目を提示。明文化されたベンガリー語の中でベンガリー語のおよび文化の保護を要求。 2月：ダッカ市内の表札や看板、ポスター、市街名表示にベンガリー語使用を増やすようキャンペーン。		7月7日：Brahui Academy Pakistan クエッタに設立。 Brahui Adabi Board が Brahui Adabi Deewan と改名。	インドで言語州制実施。
1967	3月4日：ハイダラーバード管区行政官が、スインド大学の学生生活動家逮捕を指示。 11月30日：ズルフィカル・アリー・ブットーがパキスタン人民党結成。 インドで、憲法第351条第8別表に重要言語の1つとしてスインディー語が追加される。(第21次改正)			11月26日：カラチで Baloch Students Organisation 結成。			
1968				東パキスタン学生連盟が、アイヌーブ・ハーゲン体制に反抗し、教育、司法、行政面でベンガリー語の使用を要求。			1月8日：インドで改正インド公用語法制定
1969	G.M.サイイドが、スインド統一戦線 (Sindh United Front) 結成。	連邦政府の教育方針に反対し、Punjab Adabi Sangat が初等教育段階でベンジャービー語による教育を要求する覚書を提出。					3月25日：戒厳令発令。ヤー・ハーン将軍が政權掌握。 スワート王国をパキスタンに併合。

1970	総選挙参加のため、Sindh Awami Mahaz (Sindh Awami Mahaz) 結党。 7月：スィンディー語を学内で公用語として採択するとの決議を採択。 12月：スィンディー語を省中・高等教育局が採用する。1971年度よりウルドゥー語を母語とするものに対して半易スィンディー語を必修科目とするなどの決議を採択。	2月：バハワールプール統一戦線が、バハワールプールのバンジャール州への併合を決定したことに反対し抵抗を始め、3月には指導者らが逮捕される。これを受け、12月の選挙ではバキスタン人民党が圧勝。 ラジオ・バキスタンのムルターン局が開局し、サラエキー語放送開始。	Punjabi Adabi League が聖クルアーンをパンジャブ語に翻訳。雑誌「パンジャブの声」創刊。	12月30日：ムジブル・ラマンが演説を行い、パンジャブ民族の利益のため、パンジャブ語・文化発展のために、自由を要求するよう作家らに要請。	パローチスターンが正式にバキスタンの州となる。			6月30日：「ワン・ユニット」廃止。 12月7日：初の総選挙実施。
1971	11月：言語紛争 1970年の決議に対するムルターン州の抵抗激化。 スィンディー民族も「Non Sindhis! Learn Sindhi or leave Sindhi」のスローガン。 スィンディー州議会議事堂がスィンディー語を公用語に決定。	バハワールプール藩王国がバンジャール州に併合される。 ムルターンの Saraniki Academy による週刊誌 Akhtar が休刊。				Pashto Academy 設立。	3月26日：東バキスタンが、バングラデシュ人民共和国として独立を宣言。 12月3日：第三次印パ戦争。ヤヒヤ・ハーン将軍（大統領）が、スルフィカー・アリー・ブットー PPP 党首に政権委譲。	
1972	7月：言語紛争 7月：スィンディー州知事令採択！スィンディー語およびウルドゥー語を4年生から12年生までの必修科目とする「憲法に依り、政府は裁判所および議会を含む政府各機関でスィンディー語を積極的に用いるため、各種の準備を行うものとする」	Bahawalpur Province Movement がバハワールプール藩王国に代わって Saraniki Movement 開始。				Amirul-Uloom-ul-Hind (AUH) 設立。 Amirul-Uloom-ul-Hind (AUH) 設立。	11月：英連邦から脱退。 1月11日：スルフィカー・アリー・ブットー大統領がアフガニスタンを訪問し、リベリエニスタンの問題を討議。 7月2日：第三次印パ戦争戦後処理でシムラー合意成立。	

1973	1973 年憲法でウルドゥー語の国語化が明文化される。	ズルフィカール・アリー・ブットー氏、首相に就任。	リヤーズ・ハーシューミーがバハワールプールで、Siraki Suba Mahaz 結成。						8月 14 日：1973 年憲法施行。
1974		G.M. サイドが「シヤエンス・インド運動」構想を概説した A nation in chains を出版。				11月 24 日：パキスタン TV クエッタ局放送開始。			9月：インドとの国交正常化へ。
1975			3月 14 ～ 16 日：ムルターンで Sarakiki Adabi Conference 開催。また、カラチでは Sarakiki Sangat 開催。ともに正書法を提案し、細かい相違点はあつたものの、アラビア文字をスワヒリ語を採用することとで一致。			2月 10 日：パキスタン政府が NAP の活動禁止を宣告。 11月 6 日：NAP 活動禁止処分を受け、National Democratic Party 結成。		出版社 Awaz 創刊。→1979 年まで。 スインズ州ダーブローに出版社 Brahui Publications 設立。	
1976									パキスタン国営テレビがカラー放送開始。
1978	6月 11 日：全パキスタン・ムハージル学生機構(APMSO)設立。					月刊誌「パローチー」復刊 (1981 年まで)		3月 31 日：クエッタに「パキスタン・ブラフイー文学協会(Brahui Adabi Society Pakistan)」設立。	
1979	国立言語局(National Language Authority)設立		ミヤーン・サージドがサラエキー会議を開催。			4月 19 日：パローチ指導者らが National Democratic Party を脱退し、パローチとバシクトゥーンの政治連合が結成。 6月 11 日：ミール・ゴウス・バフシュ・ビゼーンジョーが Pakistan National Party 結成。			2月：イスラーム附法導入。 4月：ズルフィカール・アリー・ブットー前首相処刑。 12月 25 日：ソ連軍がアフガニスタンに侵攻開始。 アブール・アラー・マウドゥディー(ジャマアアチ・イスラミー創設者)没。
1980		4月 25 日：ハイダラーバードで開催された全インド教育会議で、Sindh Graduates Association 創立。							

1981									3月：季刊 Sangat 創刊。(Brahui Publications Farabad)→1990 年まで。	国勢調査実施。
1983		スインディー知識者層が、中央政府に対し、イスラームとウルドゥー語を関連づけて考えないよう要求。								
1984	3月：政党 MQM 設立。 6月18日：正式に活動開始。 詩人フアイズ・アフマド・フアイズ校(1910～)。		3月5日：「新サラエーエキー州戦線」創立(政治団体)						4月：クエッタの「バキスタン・ブラーフイー文学協会(Brahui Adabi Society Pakistan)」が、季刊 De Tik 創刊。→5季で廃刊。	
1985			11月7日：ラージャンプールで Saraki Lok Sanjh 設立。その後各地に支部を設置。	1月2日：「パンジャービー語話者憲章(Charter of the Punjabi-speaking people)」に139名が署名	アターウッラー・メーロニガルが Sindh Baloch Pushun Front 結成				12月30日：戒厳令撤廃	
1986			Shagird Sanjh 創設	4月：ラホールでパンジャービー会議開催	月刊誌「バローチー」クエッタから再復刊					
1987			Siraiki Lok Tamasha がムルターンで初めて演劇を上演。 Awami National Party がサラエエキー語支部を設置。 タージ・ランガーがサラエエキー州戦線総裁に就任。		バローチスターン大学にバローチー語学修士課程開設。 4月22日：ペジャーウルで世界バシシュト会議開催。	バローチスターン大学にバローチー語学修士課程開設。 4月22日：ペジャーウルで世界バシシュト会議開催。				
1988	1973年憲法で定められたウルドゥー語の公用語化期限。中央政府は新たな言語政策を明示せず。	2月2日：ジャームシヨロロでスインディー文学会議開催。スインディー教員は全員スインディー語の知識を有しなればならないなどの決議を	バハーワール州戦線(Bahawalpur Suba Mahaz)が、「サラエエキー州」設置に反対を表明。						8月17日：ズィヤール・ハク大統領事故死。 11月：総選挙で、ペーナズィール・ブット率いるバキスタン人民党が圧勝。	

	探取。 G.M. サイドらから、 海外での議席獲得を 目指し、政党「スindh民族戦線 (Sindh National Front)」結成。	Saraiki Trinit Sanjh (サラエエキーク女性協 会)創設。 3月6日：タージ・ラン ガーがPakistan Sara- iki Party 設立。	2月3日：パンジャー ビー語日報Sai- jan 創刊。→1990 年10月廃刊。				季刊 De Tik 復 刊→1991 年まで 継続。	2月15日：ソ連軍がアフガニスタ ンから撤退。
1989	12月：上院特別委員会に「スindh平和 友好宣言」提出。スindh州の公用語と してスindh語とウルドゥー語の両方 を認め、州内の教育機関ではどちらを教 える、日常生活に両言語が用いられるよ うあらゆる手段を講じていく、などとする内 容。 インドで、インド・スindh学研究所が設 立(グジャラート州ガンディーダーム)。					Pakhtune 設立		10月24日：第五回総選挙(第 一次ナワーズ・シャリーフ政権樹 立)
1990	スindhディール言語 局設立。スindh ディール語での専門 用語策定に向け 活動開始。 5月27日：ハイダ ラーバード市のハッ カー・キラで警官 MQM)と武装グ ループが衝突し、 軍が出動。					The Balochistan Mother Tongue Use Bill, No 6 of 1990 を州議会に提出。パ ローチー語などを基 礎教育段階で教育 言語とするという内 容の法案。	Likwal	
1991			小 学 校 で パン ジャービー語の授 業開始。			Peshawar Jirga 設立	Adabi	
1992	6月：スindh州の治安悪化を理由に軍 備が出動し、MQM(アルターフ派)のテ ロ活動が鎮圧(Operation Clean-Up)。 11月：インド・スindh算研究所が、非 定住インド人ら向けスindhディール語初等 教育施設を開校。	5月6日：ビハリーの サラエエキーク語地域 への移住に反対し、 All-Parties Saraiki Al- liance 結成。				地域語(Local Lan- guages)を州内の教 育機関で選択科目 とすることを州議会 が決定。→地域語 を学ぶことが孤立化 に結びつくと、親 が反対。		
1993		1月29日：Saraiki Suba MahazがSaraiki National Partyへ党名 変更。						

1984		インドで、国立スィンデー語普及協会 (National Council for Promotion of Sindhi Language : NCPSL) 設立。						クエッタで国際ブラーフィー・セミナー開催。	10月6日：第六回総選挙 (第二次ペナズイー・ブットー政権樹立)。 10月9-11日：National Conference of Writers 開催。
1995		G.M. サイド死去							
1997									2月3日：第七回総選挙 (第二次ナワーズ・シャリーフ政権樹立)。 8月14日：建国 50 周年
1998								季刊De Tika 再復刊 (編集：アフサル・ムラード)	国勢調査実施。 5月28, 31日：ハローチスターン州内で地下核実験実施。
1999									10月12日：ムシャッラブ陸軍参謀長による軍事政変。 10月15日：非常事態宣言。憲法停止。
2000									5月12日：最高裁がムシャッラブによる政変を合憲と判断し、3年以内の民政移行を命令。
2001									6月15日：ムシャッラブ最高行政長官がターラ大統領を解任し、自ら大統領に就任。停止中だった上下両院を解散。
2002									日本との国交樹立 50 周年。 10月10日：第八回総選挙。 11月23日：ジャマリーー政権発足。
2003		1月：スィンデー言語局がスィンデー語のコンピュータ処理に関する会議開催。インドで、NCPSL 主催によるスィンデー語通用地域をめぐるシアー実施。各地での現状を視察。					10月：ハローチー・アカデミーでハローチー語正書法に関する会議開催。		
2004	4月：ウルドゥー語辞書評議会が教育省直轄機関となる。								

(注) 分離独立後の表に含まれる項目で特に国名表記がないものは、パキスタンでの事項である。

参考文献

- 白田雅之・佐藤玄・谷口晋吉編 1993. 『もっと知りたい! パングラデシュ』 弘文堂
 加賀谷寛・浜口恒夫 1977. 『南アジア現代史 II (世界現代史 10)』 山川出版社
 辛島昇編 2004. 『南アジア史 (新版世界各国史 7)』 山川出版社

- 白井 桂 「バングラデシュ・ナショナリズムの潮流—ベンガル語国語化運動を中心として」 佐藤宏編「バングラデシュ：低開発の政治構造」(アジア経済研究所 1990 年) pp.41-85 所収。
- 中村 平治 1977.『南アジア現代史 I (世界現代史 9)』山川出版社
 Amin, Tahir 1988. *Ethno-national Movements of Pakistan* : Domestic and International Factors. Islamabad : Institute of Policy Studies.
 Burki, Shahid Javed. 1999. *Historical Dictionary of Pakistan. Maryland* : The Scarecrow Press Inc.
 Dil, Anwar and Afia Dil. 2000. *Bengali Language Movement to Bangladesh, Lahore* : Ferozsons (pvt.) Ltd
 Jannahmad. 1989. *Essays on Baloch National Struggle in Pakistan* : Emergence Dimensions Reprecursions. Quetta : Gosh-e Adab.
 Malik, Ifthikhar H. 1997. *State and Civil Society in Pakistan : Politics of Authority, Ideology and Ethnicity*. London : Macmillan Press Ltd.
 Naseebullah. 2001. *Brahui Journalism & the Early Publications*. In "Balochistan Review" volume No.VI-VII, 2001. Quetta : Balochistan Study Centre, University of Balochistan.
 Rahman, Tariq. 1998. *Language and Politics in Pakistan*. Karachi : Oxford University Press.

Chronology on the “language movements” in Pakistan

MAMIYA Kensaku*

Pakistan became independent from British Raj on August 14th 1947. After the independence, the Government of Pakistan started to try to make Urdu the National language. Although Urdu is the mother tongue for only seven percent of the total population, it is widely used and understood in Pakistan, particularly by immigrants from India, without any particular regional preferences. Since other languages in Pakistan such as Punjabi, Sindhi etc. had clear linkages with specific regions or ethnicities so that choosing one language as National language may have caused regional or ethnic conflicts, the officials at Independent Pakistan thought Urdu could avoid such conflicts and represent the “Pakistani identity”.

The Constitution of 1973 declared Urdu as “National language” of Pakistan and said that Urdu should become official language before 1988. More than 80% of the population can understand Urdu other than their mother language at present. However Urdu is not an official language yet. The federal government has been unable to submit any policy to achieve this objective and English is still widely used in the government documents. In short Urdu is functioning as the liaison language in Pakistan.

On the other hand, the existence of different languages and gaps in social and

* Senior Researcher Institute for World Politics and Economy

economic status among different language speaking groups have resulted in the struggle for their identity defined by the ethnicity or language. For example, Sindhis in Sindh province has been claiming autonomy using Sindhi language as a symbol of their identity against Urdu speaking Muhajirs. Muhajir who started to live in Sindh province such as Karachi and Hyderabad based on the federal government's policy after independence became powerful in the fields of politics and economy of the country. Sindhis regarded Muhajirs as invaders to their homeland "Sindh". They started acting against Muhajirs and the federal government calling that Sindh should belong to Sindhis. G.M.Syed is regarded as one of prominent personalities for this movement in Sindh. His movement was called "Jaye Sindh".

The following chart shows the chronology of the language movements in Pakistan including West Bengal now called Bangladesh. As seen above, each language has its own history of struggle for the identity. I hope that this chart will help understanding the movements and their backgrounds of the nations living in Pakistan.